

福島原発が爆発したあの日、私の目の前にあるすべてが永遠では無くなった
当たり前にあるどれもが怖いと感じるようになった

呼吸は浅く深呼吸などする気持ちになれない

原発由来の核種は浄水器では取れないためミネラルウォーターを買う

毎日、壊れた原発からの風向きや台風を気にしながら過ごす

当然、放射能が降り注いだ事実のあるこの場所は

風が吹かずとも線量計が放射線を拾うたびに赤く点滅する

除染作業が急がれるこの町では、ダンプが頻繁に行き交い

通学路であっても容赦なく走行し道端の乾いた土埃を酷く舞い上げている

そして、少なくとも今回の原発事故の影響はないだろう：

そう思う遠い地域の野菜を買い求め生き続けている

目に見えず匂わず「直ちに影響がない」フクシマに降り注いだ放射能の影響から

今でも様々な制限のある生活を強いられている

確実に被ばくをしたあの日、あの時から一度もここに留まることを選んでいるのではない

避難移住の権利が与えられず、補償が無い地域の住民をそうするしかない構図の中に置く

それは国が勝手にしていることだが私には打開の手立てがない

さらに、構図を確立させるために様々な基準値を引き上げ逃げ遅れる人々を作りあげた

今は大丈夫なの：

〜今までのように安心して暮らせるのだよ〜

そう、国は言い続けている

それでも、あの日から不安が無くなったことなど一日すらない

住宅支援が打ち切られれば帰還しなければならない人々が現れる

でも、この町の内側はその時から何も変わらず、安心して帰還出来るという保証もない

かつての里山には、今では積み上げられたフレコンバッグの山がある

それらは無言で、今のこの町を物語っている

悲しいことに子どもは生まれ落ちた時から小児健康診査をうける

これは非常事態が続いているということではないのだろうか

除染を見続けフレコンバッグの山を里山とする環境で育つ

悲しみの中にある我が町の風景は、後に当たり前と呼ばれるようになるのだろうか

この世に生まれ落ちてから当たり前にあった私の空気、水、風、土

原発事故が起きた今はすでに元に戻すことは不可能ですべてが被ばくを意味する

フクシマでは当たり前で無くなったものがまだあなたの前にあるのなら、

しっかりと握りしめ未来の為に逃がさないでほしい、そう願う（福島県中通り 在住）

「フレコンバック... 美しい風景の中に異常なもの」フクシマの日常

放射性物質に汚染された土砂はフレコンバックで保管されている。その耐用年数はわずか3年。土壌や河川への流出などの問題が生じている